

## メディア学部における導入教育の再導入(2)

小淵究 小波津美香 寺本卓史

### Abstract

In this study, we tried to remake results and future tasks of the introduction education in our department during two years. The purpose of our introduction education improves the learning and expressive skills of students; the former in the first grade, and the latter in the second grade. To provide students solid education, we attempted to change student's education environment this year in our university. For example the class time was doubled and LAS center, Liberal Arts & Science center, was established. By the former attempt we can educate students carefully and by the latter we can provide students of all departments integrated introduction education. These findings indicated that our attempts improved not only student's skills but also motivation to the class. And future tasks were discussed.

### はじめに

城西国際大学メディア学部における導入教育の再導入は2007年度が2年目にあたる。教育上、外部環境に関して1年目との大きな違いといえるのは、1つには、授業回数の倍増である。授業回数の倍増は、大学全体の取組みとして実施された。基礎教育の充実は喫緊の課題であり、その取組みの1つが授業回数の倍増である。これまで隔週で実施されていたが、より教育効果を高めるために毎週の実施となった。毎週の実施となったことで、これまでとは違った基礎教育（以下、授業のことを指す場合には「基礎ゼミ」とする）が各学部の新たな課題となった。

もう1つの違いは、2007年4月のリベラルアーツ&サイエンスセンター（以下、LASセンターとする）の開設である<sup>1)</sup>。これまで、大学の基礎教育は、建学の精神のもとで、その運営のほとんどを各

---

1) LASセンターの説明について、本学Webページより抜粋する。「城西国際大学は、「学ぶことを通しての人間形成」および「国際社会に生きる人間としての自己形成」を建学の理念として謳い、開学以来、この理念を体現する学生を育成し、社会に送り出すことに努めております。そして、この教育目標の礎として、学生が人格形成を成し遂げ、教養を培うことを、今まで以上に、また、全学的に、推進するために、リベラルアーツ&サイエンスセンター（通称：LASセンター）を2007年4月に開設しました。当センターは、今を生きる学生一人ひとりのうちにこの建学の理念が確かな灯し火となるように、新たに、学部・学科横断的な様々な教育プログラムを開発・提供・運用し、教育効果を測定しながら、改良に努めております。特に、従来の学部教育、アドバイザー制度を支援しながら、基礎教養、人格形成に関して、学生一人一人に対する具体的な教育支援を、通常のカリキュラムを越えて日常的に行っています。このように、基礎教育を2007年4月から始めたというわけではなく、これまでの基礎教育経験を生かし、さらなる基礎教育の充実を目指すために、基礎教育を統括するセンターの設置を行った。

学部がそれぞれに行っていた。そのため、各学部での基礎教育の実績は蓄積されてはいたが全学的な状況把握が完全にできていなかった。LASセンターの開設により、より全学的に統一的に基礎教育を展開できる基盤が整備され、入学から卒業までの流れの中で確実に学生個々に対してある一定レベルの基礎教育が常に提供される体制が構築されたことになる。

本稿では、こうした変化と1年目である2006年度の取組み結果の課題をふまえ、2年目である2007年度のメディア学部の「基礎ゼミ」の取組みの状況及び課題について報告するものである。最初に2006年度の「基礎ゼミ」とその課題についてふれた後、2007年度の取組み状況について、1年次対象の「基礎ゼミⅠ」と2年次対象の「基礎ゼミⅡ」に分けて整理し、「基礎ゼミ」の課題、また基礎教育に関する課題と展開可能性について考察する。

## 1. 2006年度「基礎ゼミ」<sup>2)</sup>

### (1) ニーズの分析と対応

2006年度「基礎ゼミ」では、まず学生のニーズを把握することから始まった。その結果としてあげられたニーズは以下の3点であった。

- A. 参加型授業
- B. 少人数クラス
- C. 実社会とのつながり

これらの点は、「基礎ゼミ」だから求められるものというより、すべての授業において求められるものであり、予想可能なアンケート結果であった。Aの参加型授業への対応は、作業もしくは発表主体の授業にすることであった。限られた授業時間の中で多くの情報を発信しインプットしてもらおうとしたことから、一方通行的な授業が増え、結果として授業に参加しているという印象をもち得ない授業となった。たくさんある伝えたい情報をコンパクトにまとめ、説明は要点のみにとどめ、多くを作業もしくは発表時間とした。時間としては、説明は長くて30分、作業もしくは発表時間を1時間以上とるようにした。Bの少人数クラスへの対応は、「基礎ゼミ」の授業を実施する教員を増やし、1人あたり多くても30名程度となるようにした。クラスが少人数になることや毎回同じ教員がそのクラスを担当することにより、学生個々人の状況把握を目指した。教員が隔週で約200名に対して交替で授業を実施するだけでは、半期に1度、多くて2度しか担当しないため、学生個々人の状況を把握するのは難しく、適切な指導という点でも課題を有していた。Cの実社会とのつながりへの対応は、学生たちが考えたアイデアに対し企業をはじめとした外部の人、現場の人を訪問し、コメントをもらう、という学外見学会を実施することとした。実社会とのつながりという点については、学外の専門家や実務家を招いての講演等の機会はこれまでもあったため、同様のものでは学生のモチベーションや新鮮さの面への刺激が小さいと思われたため、新しい仕かけとして、アイデアコンテスト形式を取り入れた。

---

2) 詳しくは、小淵ほか [2007] を参照されたい。

## (2) 2006年度「基礎ゼミ」のポイント

### ① 「基礎ゼミⅠ」

2006年度「基礎ゼミⅠ」のポイントは次の2点であった。

A. 作業及び発表を中心とした授業内容

B. 資料を新規に作成

Aについては、参加型授業というニーズに対応したものであった。課題に取り組んだり発表したりするには1コマ90分という時間は短い、その中でコンパクトに要点を把握してもらい実践してもらった。説明は長くても30分にとどめ、ほとんどの時間は課題に取り組んだり発表したりする時間にあてた。

Bについては、担当教員の導入教育への理解の深化と資料のメディア学部学生への適合性の確保とを目的としていた。「基礎ゼミ」を通じてこれまで導入教育を着実に実施してきたが、資料を新規に開発することで改めて導入教育を考え直すこととなった。当初は、あるいは教員によっては、市販されている先行資料を利用して実施しようという考えもあった。結果として先行資料を利用しなかった理由は、教授したい内容及び形式と適合するものがなかった、ということである。もし求めるものがあったならば、それを利用しつつ、補足資料を新規で作成するか、もしくはそれを最大限参考にしなが資料を作成していただろう。ただ、実際には、求めるものに出会うことができず、一から資料を作成することとした。

### ② 「基礎ゼミⅡ」

2006年度「基礎ゼミⅡ」のポイントは次の点であった。

A. 学生主体のアイデアコンテストの実施

B. アウトプットオンリーの授業

C. 友達同士ではないチームメンバーによる共同作業

D. 選抜されたチームの学生を中心とした企業見学会

Aについては、論理的思考力の向上を目指すことを目的としたものであった。現在、さまざまな「力」が求められる時代になったが、そのさまざまな「力」の本質は論理的思考力であるといえる。この論理的思考力を向上させるには、自ら問題を発見し解決方法を考え実行する、という作業を繰り返すことが重要であり、それを実現するには、与えられた課題を作成したりすでに答えのわかっているケーススタディを学習したりということでは達成されず、だれも答えのわからないことに対して試行錯誤を行うことが必要である。規模が小さい場合には、個々人の興味のあるテーマにそって実施することも可能であったが、200人規模で同時に行わなければならないため、アイデアコンテストという形式にした。

Bについては、アイデアや発表・報告の仕方について敢えて細々と指導しないスタイルを決めたのは、アンケートにおいて一方通行の授業に辟易している旨の記述が多くを占めていたことから、学生の思いどおりに思い切って発表・報告をしてもらいたいということが1点、もう1点は、実際に発表・報告をしてみることで、一方通行であった「基礎ゼミⅠ」においてインプットしていたはずである発表・報告のノウハウがそもそも知識として定着しておらず、退屈に感じる知識のインプットの大切さ

を再認識してもらいたいということを考えたからである。

Cについては、協調性を培うとともに新しい感覚や考え方にふれることによって視野を広げることを目的として実施した。知らない人同士でのチーム編成は、時として問題を生じさせるが、無理にでも機会をつくり出さない限り、一度できた友達グループの枠を越えて共同作業を行うということはほとんどない。創造力を培うという面においても、さまざまな人と出会い、思考の交流をすることは重要である。

Dについては、実社会とのつながりのニーズのうち企業社会とのつながりを体感してもらうために企図したものであった。社会科学見学会との違いは、現場で活躍している方々に、チームで考えたアイデアを直接評価してもらう、また日頃の疑問や興味に関することを直接質問できる、というものである。学生全員に対して同時にこのような機会を提供することが希望ではあるが、実行可能性の問題から選抜されたチームの学生を中心とした10人程度が企業見学会に参加できることとした。投票により取り組むテーマを決め、テーマに皆で取り組み、優勝チームを選抜し、企業見学会を行い、その様子を皆で共有する、このフィードバックまでがアイデアコンテストの1サイクルである。

### (3) 2006年度「基礎ゼミ」の課題

#### ① 「基礎ゼミ」の課題

2006年度「基礎ゼミ」の全体的な課題は以下のような点があった。

- A. 教員間コミュニケーション
- B. コア分野別アドバイザー制度の意義
- C. エフォート
- D. 学びの正のスパイラルへの継続的チャレンジ
- E. 無形の身分証明書の具現化
- F. 準パーソナル教育の構築

各項の詳細は、小淵ほか [2007] を参照願いたい、各課題は、実施面と評価面に分類できる。A、C、Fは実施面の課題であり、B、D、Eは評価面の課題である。教員間のコミュニケーションは不十分であり、また「基礎ゼミ」に対するエフォートも十分とはいえない状況で実施したのが2006年度「基礎ゼミ」であった。授業開始直前にこれまでの「基礎ゼミ」から新しい「基礎ゼミ」へと実施形式を変えることを決めたため、どのような「基礎ゼミ」にしていくかを議論するような準備期間はほとんどなく、効果的な「基礎ゼミ」がどのようなものかを模索した1年であった。教員間に「基礎ゼミ」に対するモチベーションの相違があったのも事実であり、エフォートにも大きな隔りが出た。試行1年目ともいえる2006年度「基礎ゼミ」を評価するという面で捉えた場合にも課題が残った。学生アンケートの結果では改善されたことが明らかになったものの、継続的データではなく、検証可能な評価内容ともいえないものであった。より効果的な実施する上では、評価の客観性、検証可能性を確保することが求められた。

#### ② 「基礎ゼミⅠ」及び「基礎ゼミⅡ」の課題

2006年度「基礎ゼミⅠ」の課題は次の点であった。

## A. 内容のジレンマ

ここでいうジレンマとは、基礎的な内容は必ず実施しなければならないが、基礎的な内容を実施すると逆に学生のモチベーションが下がることがある、というものである。必ず実施しなければならない内容なので、実施方法の工夫以外にこのジレンマを解決する道はない。基礎的内容については小学校の頃から何度も取り組んできたことであり、好きなことができると思って入学してきた学生に対して、たとえば「本の読み方」といったテーマを提示すると、途端にモチベーションが下がる。しかし、本をきちんと読めるのか、主題を捉えたり要約して記述したりすることができるかという点、満足いく水準を確保できない学生がいるのは確かである。したがって、必ず実施しなければならない内容であるが、工夫を要するのである。

2006年度「基礎ゼミⅡ」の課題は次の点であった。

- A. チーム編成
- B. 設置時間
- C. 取り組む分野

これらの課題のうち、一番大きな課題はチームメンバーである。知らない人同士でチームを編成するため、課題に取り組むのに障害が発生するのである。また、メンバーの中に課題に積極的に取り組まない消極的あるいはまったくやる気のない人がいると、友人同士であるときよりも憤りや嫌悪の気持ちが増幅し、改善してほしい点の多勢を占めた。

## 2. 2007年度「基礎ゼミ」企画案

### (1) コンセプト

2007年度「基礎ゼミ」を実施するにあたっての新たなコンセプトは以下の点である。

- A. 基礎と専門の融合
- B. 基礎と社会の融合

上記のようなコンセプトを掲げた理由は、以下の点になる。

- i 基礎的内容の実施に対する不満が多くあるため
- ii 他の授業との連動可能性の向上させるため
- iii 退学・休学者の減少させるため

「基礎ゼミ」では、特に「基礎ゼミⅠ」では、大学での学び方、レポートの書き方、本の読み方といったような基礎中の基礎の内容を取り上げ授業を実施しているため、学生の多くが、その意義を理解できず、不要なものだと考えている。これは、内容の問題ではなく実施方法の問題である。たとえば、レポートは大学生になって初めて作成するものではない。そのレポートの書き方を力説したとしても効果は思ったほどあがらないと考えていだろう。なぜなら、そのテーマを知った時点でモチベーションがかなり下がっているからである。レポートの書き方や文章の書き方といったことは大学以前の教育課程において学んできたことであるため、再度インプットするドアの入口を閉ざしてしまうのである。そのドアを開け、もう一度インプットし直し、作成スキルをアップさせていく、さらには社会人になっても継続的にスキルをアップさせ続けなければいけないものだと気づかせる仕掛け

くりをしなければならない。そのためには、興味のあるテーマ、分野と連動させる必要がある。興味のあるテーマ、分野は、もちろん、各学生が取り組みたいと思って入学した、メディア学部であれば、映像・情報・デザイン・サウンド、である。「基礎ゼミ」が実施すべき範囲は本来、専門の基礎を学ぶ上で必要なさらに基礎的なスキルを学生全員に身につけてもらうことであった。しかし、この基礎的なスキルを身につける作業をそのまま実施していたのでは学生のモチベーションがあがらないという事実がある。そこで、「基礎ゼミ」を専門あるいは社会と融合させることで、「基礎ゼミ」で実施している内容の重要性を認識できるように工夫するような実施方法はないかと検討した。

その結果、「基礎ゼミ」という授業のみで実施するのではなく他の授業と連動させるという方法を提案することとなった。「基礎ゼミ」は毎週開催と授業数が倍増したものの、週1回1コマのみで基本的なテーマと専門及び社会とを具体的に結びつけることは困難であった。そこで、「プロジェクトⅠ」及び「プロジェクトⅡ」という科目と連動させることが考えられた。両科目は、1年生、2年生を対象に、メディアに関連するさまざまな内容で実施されており、比較的实施内容の自由度の高いものである。この科目と連動させることで、基礎的な内容から専門、社会へのつながりを実感できる枠組みづくりができると考えたのである。

一方、視点がまったく異なるが、退学者・休学者を減少させるためにも、早期に専門的な内容あるいは社会とのつながりを実感させる必要があった。退学者や休学者のその理由はさまざまであるが、メディアの面白さを十分に得ることができずに退学や休学に至るケースも少なくない。これまでの大学教育に倣い、カリキュラム構成は基礎課程から専門課程へという流れになっている。こうしたカリキュラムの場合、入学前に学生がイメージしたような作品づくりができるのは専門課程になってから、つまり、専門課程とまではいかなくても入学後すぐにはなく1年以上経ってからということになる。入学後すぐに音楽をやりたい、映画を撮りたい、CGでゲームをつくりたい、といった希望をもって学び始めてみたものの、いつまでも基礎的なことに取り組みなければならないとなると、希望と現実のギャップに耐えられない学生も出てくる。多くの学生には基礎的な作業から専門的あるいは高度な作業への道が見えているため問題になることは多くはないが、その道が見えないことによって進むべき道を探せずにいる学生への対応が重要となる。基礎的な教育を実施している「基礎ゼミ」も道を探せずにいる原因になっているため、工夫が必要となるのである。

## (2) 実施案

実施案の特徴は、イベントの実施と他の科目との連動の2点になる。2006年度に実施した「基礎ゼミ」の内容は大きく変えることなく踏襲し、実施内容を追加する形とした。

イベント実施案の項目は以下のようなものがある。なお、項目右はそれぞれのテーマである。

- A. 大福帳ブログ版……………教員と学生とのコミュニケーション
- B. 学生手帳開発……………目的意識の明確化
- C. 自己紹介帳……………友達づくり
- D. ユニフォーム作成……………一体感の創出
- E. アドバイザー対抗スポーツ大会……………コミュニケーションの深化

F. 九十九里海岸清掃+バーベキュー……………ボランティア精神養成

G. 複眼計画 (写真 20000 枚計画) ……………視野拡大と柔軟性創出

後述するが、この案のうち、実現したのは、C 及び E である。実現しなかったものについてふれておくと、A の大福帳は、イメージとしては、授業に関する教員と学生とのコミュニケーションを円滑にする交換日記帳のようなものである。授業の最後にアンケートを行い、それが記載された大福帳を回収し、次の授業までに朱記コメントし、返却する、というのが大福帳のサイクルである。このサイクルをブログを通じて実施しようとした。B はキャンパスライフのプランニングを促進するという狙いもあった。キャリア形成の状況をすぐに明示できるものがあれば、学生手帳という形式以外のものでも可能である。常に学生が所持しているものは学生証と携帯電話であるため、学生証もしくは携帯電話を利用したものも考えられたが、予定を自己管理して物事を遂行していくといったことをより強調するため手帳という形式で提案した。D については、メディア学部 of T シャツや Polo シャツをつくることを想定していた。メディア学部においては、授業内において、また学外の企業や組織とのプロジェクトにおいて共同作業する機会が非常に多い。その際に統一のユニフォームがあると、より一体感を創出しアイデンティティを萌芽させることができる。F については、ボランティア精神の涵養を目的とした活動と実施要望の多いバーベキューの組み合わせである。G については、あるテーマについて、あるいは同じ時刻に、あるいは同じ場所で、1 人 100 枚の写真を撮影しそれらを合わせて 1 つの作品をつくることを想定していた。同じテーマであってもさまざまな見方があり、同じキャンパスライフでもさまざまな過ごし方があり、同じところにおいてもさまざまな表情がある、ということを実感することを目的としていた。このように、案としてはいくつかが提示されたが、実現したのは 2 つにとどまった。実現できなかった理由はいくつかあり、それらは時間的な問題、金銭的な問題に集約できるが、このような問題は常に存在するものである。したがって、今後の実施に向けてはさまざまな工夫を講じていかなければならない。

他の科目との連動は次のような 2 つを考えた。他の科目とは、主に 1 年生を対象とした「プロジェクト I」及び 2 年生を対象とした「プロジェクト II」である。

他の科目との連動は次のような 2 つを考えた。他の科目とは、主に 1 年生を対象とした「プロジェクト I」及び 2 年生を対象とした「プロジェクト II」である。

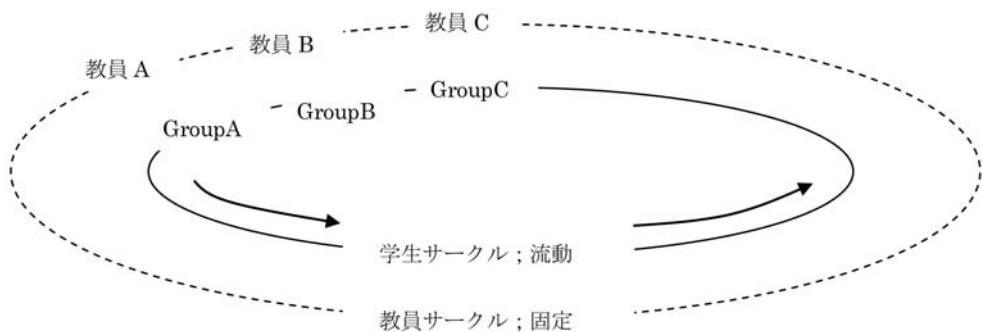


図 1 プロジェクトサークル I

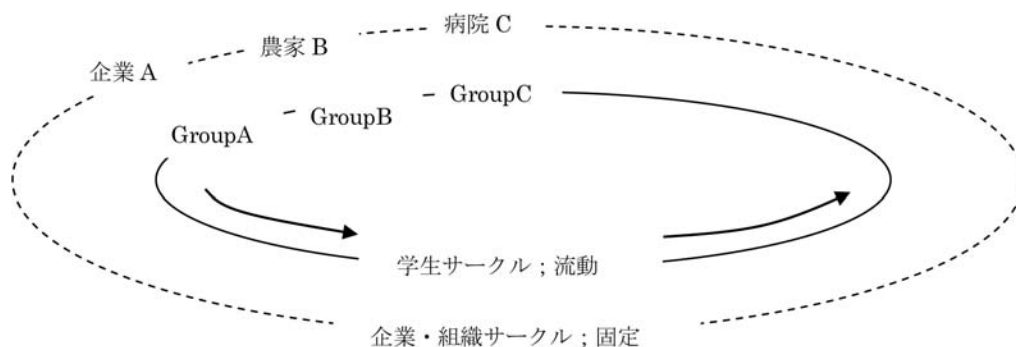


図2 プロジェクトサークルII

図1が「プロジェクトI」で実施しようと考えたもので図2が「プロジェクトII」で実施しようと考えたものである。いずれも同じ発想で、図1はプロジェクトサークルの教員バージョンで図2はプロジェクトサークルの企業・組織バージョンである。それぞれ、2つサークルがある構造をしており、1つは固定、もう1つは流動となっている。イメージは、デパートで各ショップをお客が見て回るというもので、教員が実施しているワークショップを学生グループが交替で受ける、見学先を学生グループが交替で訪ねる、といった具合である。期間は隔週を想定している。教員の専門性は一様ではなく多様であるため、それらのワークショップを少人数クラスで体験することによって、学生はさまざまな分野の魅力を感じることができ、基礎から専門への移行がスムーズになる。また、企業や組織の見学も一分野に偏ることなく社会を構成する多様な業種業態を見て回ることで、キャリア形成への刺激になるとともに視野拡大に伴う思考の柔軟性が向上することが予想される。見学先も遠方ではなく近隣が主になるため地域に目が向くという効果もある。このように、学生全員が、基礎と専門、基礎と社会のつながりを実感できるようにするために企図されたプロジェクトであったが、実行には至らなかった。実施できなかったイベント案と同様、その問題は時間的、金銭的なものに集約できるが、これらの問題を解決し、これに近いプロジェクトが実施できるようにしなければならない。

### 3. 2007年度「基礎ゼミ」<sup>3)</sup>

#### (1) 「基礎ゼミI」

##### ① 教員解説用資料

「基礎ゼミI」では、新規に資料を作成し、メディア学部版『スタディスキルズ』が2006年度に完成した。ただ、この『スタディスキルズ』はまだ完全なものとはいえず、追加的に盛り込むテーマも検討されている<sup>4)</sup>。2007年度『スタディスキルズ』では、教員解説用資料が新たに作成された。簡易なものではあるが、各項目の狙いや目的、説明する際のポイント等がコンパクトにまとめられている。教員用解説資料は、市販の『スタディスキルズ』の類のテキストでもよく見受けられる。テキスト自

3) 2007年度「基礎ゼミ」で新たに取り組んだテーマについてふれる。「基礎ゼミ」で実施している具体的な項目や内容については、小淵ほか[2007]を参照されたい。

4) たとえば、一流のススメ、ババ抜き社会を変えよう、というテーマが検討されている。



体は学生用に作成されているため、行間が省略されていることが多い。なにを目的に作業をさせようとしているのか、作業したことによってなにを得ることができるのか、作業状況によってどのように学生にアドバイスをを行ったらいいか、説明する際にはどの点を忘れずに伝えなければならないか、といったようなことが、テキスト作成者以外の者が理解できない場合もある。それを補足するものとして、教員用の資料が用意されることが多くなっている。メディア学部版『スタディスキルズ』についても、事前の打ち合わせやメールにて、上記のような疑問には極力回答するようにはしているものの、やはり手元に説明用の資料があることが重要であるため、作成することとなった。

## ② 自己紹介帳

目的は、友達づくりである。自己紹介帳作成案は以前からあったものであるが、オンデマンド印刷機導入といった環境整備の変化もあり、作成することとなった。自己紹介の項目やレイアウトは、原則的なものは教員が設定したが、与えられた範囲を自由にデザインすることを許可した。作成作業には1年生から3年生までの学生に参加してもらい、一部編集作業を除き、学生主体で作成できるような準備を行った。作成までに予定を越える日数がかかったが、自己紹介帳を作成したことは概ね好評で、どのようなメンバーがメディア学部にいるのかを知るバイブル的なものとなった。「基礎ゼミⅠ」以外の授業で共同作業をする際に、自己紹介帳から共同作業をするメンバーの情報を入手できたことで、苦手であった他者とのコミュニケーションがスムーズになったといったケースもある。本来、コミュニケーションはフェイストゥフェイスの状況で行えることが理想であるが、それを得意としない学生も多く、そのような学生への支援という意味でも自己紹介帳作成意義はあったといえる。

## ③ アドバイザー対抗スポーツ大会

スポーツ大会への学生及び教員のニーズは少なからずある。スポーツは、人間力を鍛えやすい分野である。チームスポーツであれば一体感も出て、メンバー相互のコミュニケーションの深化が可能となる。問題は、いつ、なにを、どこで、どのように実施するか、ということである。「基礎ゼミⅠ」の割当時間以外のところで実施することは難しく、場所も限られている。また、球技といった種目では、学生全員が参加して取り組むことは難しく、まただれでもできるといったスポーツでもない。実施方法も、学生がやりたいものを自由にやらせる、といったスタンスでは望ましいとはいえない。第一候補としてドッチビーという種目があがったが、体育館の使用が難しいこと、一度に参加できる学生が少ないこと等から別の種目を実施することとし、結果、長縄跳びを行うこととなった。スポーツを実施した実績は残せたものの、工夫すべき課題は多く残った。まず、スポーツをそもそもしたくないという学生に対し、興味をもってもらえるような種目や方法で実施する必要があること、次に、競い合う中で一体感をさらに創出できるような状況を設定すること、こうした点のほか、実施時期を工夫することで、スポーツ大会は、大きな展開可能性をもっている項目といえる。

## ④ 企業見学会

2007年度入学の学生は、授業開始前のフレッシュマンセミナーと呼ばれる新人合宿において、クレイアニメーションを4、5人のチームによる共同作業により作成した。例年、「基礎ゼミⅠ」の時間を利用し、優秀作品を作成したチームを表彰する表彰式を行っている。2007年度「基礎ゼミⅠ」では、表彰に加え、クレイアニメーション作家の伊藤有壹氏（株式会社アイトゥーン代表）からこれからメ

ディアを学ぶ1年生へのメッセージ及び取材の様子を上映した。伊藤氏取材は、メディア学部のメディア教育の軸がぶれないことに配慮しつつ、NHKで放映されているニャッキ!の生みの親である伊藤氏の言動が学生にとって大きな刺激になると考えたことから企図されたものであった<sup>5)</sup>。また、フレッシュマンセミナーで取り組んでいるテーマの魅力を継続的に学ぶ機会が少ないことから、自発的に学ぶ学生が1人でも多く誕生してほしいという期待も込められていた。

#### ⑤ 各種テスト

実施内容にテスト形式を多く取り入れた。形式だけでなく、結果を評価に反映させるようにしたことと、これまでの、出席していれば高評価、といった状況ではなくなった。そのため、学生の取組み姿勢は大きく変わった。テスト形式でない場合、大学での講義の受け方の練習を実施しても、真剣さが不十分であったが、テストにしたことによって集中力が格段にあがったことは確実である。

これまでの作業をテスト形式にしたことに加え、TOEICや漢字検定試験等の資格試験の問題を使用したテストも実施した。近年では、就職活動に向けて、常識試験もしくはSPI試験対策と並んで、資格取得の重要性が非常に高まっている。しかし、資格を取得するといっても、実際にどのようなものがあるのか、それはどのような試験なのか、といったことを学生が理解するのは容易ではなく、理解しチャレンジするのはごく一部の学生に限られていた。早期に実際の問題にふれ、早期にチャレンジすることによって、就職活動が本格化する3年次末にはしかるべき準備が整っているようにするために、実際のテスト問題を利用し、またテスト形式で真剣に取り組んでもらうことによって、資格取得を啓発するというを行った。

#### ⑥ 評価基準

これまでの「基礎ゼミⅠ」は、出席状況が評価基準の大半を占めていた。授業中の取組み状況には曖昧さがあり、またテスト等は実施していなかったため、判断材料としては、出席状況を利用せざるを得ない状況であった。この、出席していれば高評価、といった評価基準は、「基礎ゼミⅠ」の運営を難しくしている原因の1つであった。つまり、授業内容が至って基礎的であることから、あえて学習しなくても問題ないと多くの学生は判断し、またその基礎的な技術が身につけているかということをチェックするテストも実施されていなかったことから、自己判断の正否を正確に判断できず、またそれが評価に直接結びつくこともないことから、取組み姿勢の真剣さに不十分な面があった。さまざまなテストを評価基準に入れ、またスピーチやプレゼンテーションにおける取組み姿勢も評価対象にしたことで、例年とは異なる取組み姿勢が見られた。課題は、「基礎ゼミ」という科目の性質及びこれまでの「基礎ゼミ」の経緯から、低評価を付すことに対する抵抗感から脱しきれないという点である。

### (2) 「基礎ゼミⅡ」

#### ① 基礎説明

「基礎ゼミⅡ」ではアイディアコンテストを実施しているが、授業内容は、途中経過の報告とプレゼ

---

5) 突然の申し出にも快く取材に応じていただき、この場をお借りして改めて感謝申し上げる。なお、伊藤有壹氏は、2008年4月より東京藝術大学大学院教授に就任する。

ンテーションで構成されている。2006年度では、決まったテーマについて特に教員から説明することなく、ほぼ学生主体で考え、発表するということを行った。このような方法を選択し、実行したのは、1つには、「基礎ゼミ」以外の授業でもプレゼンテーションを学ぶ機会は多くあり、もう1つには、たとえば、映画のシナリオを考えるというテーマについても、シナリオ制作に関する授業を履修済みであったり履修中の学生が少なからずいたりすること、また、例示をしたりするとそれに縛られてアイデアが出にくいこと、といった理由からであった。一方通行的な授業に強く不満をもち、自由にやりたいという希望も存分に反映させて、教員はオブザーバーに徹することによって、「基礎ゼミ」を学生がつくりあげるという方法で実施した。

しかし、この方法で問題になったのは、一部の積極的である程度の知識を有している学生にとっては有意義に取り組むことができるものの、多くの学生にとっては、なにをどのようにやっているのかわからず、教員が手抜きをしているとの印象すら与えることとなった。映画のシナリオを考える、といったテーマの際にも、映画の長さやキャスト、どの年代にターゲットを絞るか等、関連する事項すべての設定を自由に任せため、それらの設定を自分で決め切れないチームは、最終アウトプットがコンテストに参加できる状況に達していなかった。

そこで、2007年度では、説明が必要な内容については適切な指示をし、一方通行的にはなるものの、授業も実施した。前期はTシャツデザインコンテストであったため、デザインに関する授業をデザイン分野の教員に実施してもらった。デザイン分野以外の学生にとってはデザインについて学ぶいい機会であり、取り組む際に役立つものとなった。後期は東芝REGZAのCMを考えるというものであったが、CM制作に向けて、まず商品リサーチを行いコンセプトを決め、次にコンセプトにしたがって具体的なCMをイメージする、という一般的なCM制作の方法を示し、それにしたがって作業を進めた。最終アウトプットのCMプレゼン用のパワーポイントと絵コンテ作成に向けてどのように皆で話し合い進めていけばいいのかということを具体的に指示したことによって、混乱なく各チームが作業を進めることができた。

## ② Web投票システム

前期のTシャツアイデアコンテストに関連して、Web投票システムを開発した。通常は、各クラスの代表チームが最後のプレゼン大会に出場し優勝チームが決定される。Tシャツデザインコンテストは、Tシャツのデザイン及びコンセプトによって選抜が行われるという形式であったため、データをWeb上にアップし投票できるようなシステムを開発すれば、全チームが同時にプレゼン大会に向けて競うことができる環境整備ができると考えた。実際に完成したWeb投票システムは、学生、教職員、学外者が投票できるシステムとなった。だれがいつどのチームに投票したのかが把握できるようにし、特に学生については参加したかの有無を把握し、参加していない学生については公開して投票を促した。当システムでは、パソコンだけでなく携帯電話からも投票ができるようになっている。このシステムは今後、他の用途でも展開可能なシステムであると考えられる。

## ③ 留学生との交流

2006年度より、メディア学部では、中国は北京にある伝媒大学から留学生を受け入れている。2007年度には、法人として正式に協定を締結し、研究・教育の面で交流を深めていくことが約束された。

2007年度も26名の留学生を受け入れている。これまでも留学生は多く受け入れてきたが、日本人学生との交流が盛んとはいえない状況であった。それは、交流する機会がほとんどないことに起因していた。留学生が最初に受ける授業の多くは日本語であり、学部の授業を受ける機会はそれほど多くなく、また授業を受けたとしても、留学生は留学生、日本人学生は日本人学生といった壁があり、交流が進みにくい状況であった。そこで、留学生チームを別個に設けるのではなく、日本人学生と留学生の混合チームを編成することとした。最後まで交流が進まなかったチームもあったが、プレゼン大会に残ったチームもいくつかあり、相互に刺激を受けながら、交流を深めることができた。

#### ④ 評価基準

評価基準については、「基礎ゼミ」全体の課題でもあったのだが、2007年度は、出席状況に加え、取組み状況を客観的に把握できる基準として、課題提出及びテスト実施を新たに設けた。これまでは、授業中の態度等から取組み状況を評価していたが、各教員の判断にばらつきが生じ、評価基準について文書化も試みたが判断のばらつきを修正するには至らなかった。この状況はまた、学生の評価への不満の一因となっており、改善すべき点であった。そこで、そのような相対的な評価基準に加えて、課題提出をしたかしないか、テストの点数は何点であるか、といった絶対的な基準も評価基準に加えることによって、最終評価の公平性が向上した。

### 4. 課題と新たな展開

#### (1) 未解決課題

新「基礎ゼミ」は2年目を終えたが、1年目の2006年度「基礎ゼミ」の課題のうち、多くを解決できないままに次年度に繰越すこととなった。本稿1(3)において2006年度「基礎ゼミ」について取り上げたが、再掲すると以下のような課題があった。

[全体]	[基礎ゼミⅠ]	[基礎ゼミⅡ]
A. 教員間コミュニケーション	A. 内容のジレンマ	A. チーム編成
B. コア分野別アドバイザー制度の意義		B. 設置時間
C. エフォート	C. 取り組む分野	
D. 学びの正のスパイラルへの継続的チャレンジ		
E. 無形の身分証明書の具現化		
F. 準パーソナル教育の構築		

#### ① 全体

課題としてあげられたもののうち、解決されたもの、あるいは解決に向かっているものは、D、E、Fである。基礎教育の成果を可視化することは容易ではなく、またその成果が基礎教育によるものなのかということについて客観性を具備するのも容易ではない課題であった。可視化の最も容易な方法は数値化することである。これは、授業内におけるテスト及びLASセンター主催の基礎能力統一テストによって可能となった。これによって、今後、統計的に基礎能力の推移を把握することが可能となった。ただし、これで明らかにできるのは、基礎能力の1部に過ぎない。コミュニケーションやプレゼンテーション能力といったものは測定できないため、今後も無形の基礎能力の成果判定基準の開

発は行っていかなければならない。教育面では、「基礎ゼミ」の枠組みの中では実施できていないが、自主ゼミという形式によって対応を試みている。文章力や TOEIC 対策をテーマとした自主ゼミによって、学生たちとフェイストゥフェイスの指導を実施することができている。規模が小さいという課題は残るが、小さいからこそ効果が大きくなるというメリットを生かすため、自主ゼミを実施する教員を増やすことが今後の課題といえる。

課題として解決されていないものは、A, B, C である。これらは、カリキュラム編成等と深くかかわる部分でもあり、すぐに解決できる性質のものではない。ただし、常に課題の所在を明らかにし、変更可能な際にすぐに変更できるように準備をしておかなければならない。基礎教育を実施する際のポイントの1つに少人数クラスがある。現在、約30人規模で行っているが、多くの大学で実施されている基礎教育の1クラスの人数に比べると倍に近い。一般的には10～15人が多いようである。この人数で実施するためには、メディア学部であるならば、毎回全教員の実施が不可欠となる。あるいは、学生が隔週で交互に授業に参加するといったことになる。たとえば、現在の実施教員数を維持したままさらなる少人数クラスを実施するために、メディア学部の「基礎ゼミ」とLASセンターが実施する講座とを交互に受けるといったことも考えられる。教育効果をあげるにはさらに少人数クラスにする必要があるという認識のもと、実現可能性のある実施方法を模索しなければならない。

## ② 「基礎ゼミⅠ」

現在実施しているテーマを継続していく以上、この課題も継続するものとする。したがって、この課題の大きさをより小さくする魅力的な授業実施方法を毎年考え行っていかなければならない。基礎的な内容は無味乾燥ではあるものの基礎能力の充実にはさまざまな面に潤いを与える。

これまで、基礎的な内容を1年間かけて実施してきた。たとえば、これらの内容のうち、説明が多い項目については前期に終了させ、後期は作業及びテストのみで実施し、より実践力を向上させ、効果の可視化をすることによって学生の取組み妙味を向上させるといったことも一考である。また、2007年度は実現しなかったが、2007年度「基礎ゼミ」として企画したもののうち教員ワークショップを1ヶ月間だけでも開催するといった変革が必要である。学んだことの実践、あるいは実践しながら学ぶ、こうした体験が基礎能力の定着につながるからである。

## ③ 「基礎ゼミⅡ」

これらの課題は、学生の要望に基づく課題であり、かつ解決する必要がある課題であるかどうかは注意を要するものである。学生の要望で最も多いのはチーム編成に関するものであり、好きな人同士で、友達同士で、やる気のある者同士でチームをつくりたいというものである。教員側が勝手に決めたチーム、くじ引きで決めたチームでは、メンバーが知らない人だったりやる気のない人だったり気の合わない人だったりして作業をする気にならないといった問題である。モチベーションが下がるといって解決すべき課題といえるが、では友達同士でチーム編成すればいいかということそれはまた別の問題を生じさせる。「基礎ゼミⅡ」ではアイデアコンテストを実施しているため、いいアイデアを出すことに「基礎ゼミ」がフォーカスしているかのように認識されるが、重視しているのは、そのアイデアが出て報告されるまでの過程である。「基礎ゼミ」ではできなくても、友達同士で共同作業をする機会は存分にある。初めて話す人と、考え方の違う人と、趣味がまったく異なる人とコミュニ

ケーションしながらなにかを生み出す作業は、さまざまな力を身につけるにはとても有用である。したがって、知らない人同士でチーム編成してもモチベーションが低下しないような仕掛けづくりによってこの課題を解決していかなければならない。

## (2) 基礎能力統一テスト

基礎能力統一テストは、LAS センター主催で1年生、2年生、3年生を対象に行っている。内容はSPI試験に類似しており、言語分野と非言語分野に分かれ、それぞれに結果が示され、その後の学習プランに反映できるようになっている。この基礎能力統一テストの効用は、学生自身及び教員が個人々の基礎能力を統計的に把握することができる点である。「基礎ゼミⅠ」でも類似のテストを実施したが、今後はLASセンターのテストを活用することが有用である。なぜなら、基礎能力統一テストは全学的に実施されているものであるため、全学の中でメディア学部の状況はどのようになっているのかということ把握でき、また今後は全国の大学生との比較可能性も確保される予定であるため、メディア学部の基礎教育の成果の判断材料の1つとして基礎能力統一テストを活用できるようになる。今後の課題としては、1つには、全国の大学生との比較可能性を少しでも早期に確保することがあげられる。現在では、それぞれの学部内での位置づけしか把握できないため、学部内での偏差値や順位が高位だからといって好成績かどうか判断できない点に課題がある。より統計対象の母集団を大きくし統計的に有用な情報提供ができる環境整備が必要である。いま1つには、結果に対するフォローである。現在は、好成績だった学生、及び補習が必要と考えられる学生に対してLASセンターが有料で講座を開設しているが、各学部の「基礎ゼミ」と連動させることで効果をよりあげることが可能である。個別の対応が必要になってくるため、「基礎ゼミ」の枠組みの中で対応可能なのか、可能であるならばどのように対応体制を整備すればいいのか、といったことを早急に検討しなければならない。

## (3) Media-SNS

2007年11月よりMedia-SNSを試用運転している。2008年2月現在、一部の教職員、学生、卒業生によって活用されている。SNSは信頼できる限られたメンバーによりコミュニティを形成し、メンバー相互の交流をより一層深めることを狙いとしている。Media-SNSを「基礎ゼミ」で活用することは、メディア学部の教育のさらなる充実に貢献するものであり、学生の状況をより把握することを可能とする。2007年度開始時点で大福帳ブログ版が企画されていたことは先述のとおりだが、Media-SNSが本格運用されれば、同じような効果が期待できる。

課題は、Media-SNSの活用深度である。一般のSNSと同様に、活用されるための工夫がいくつも必要である。現在のところ、特別な工夫はないが、SNSに興味をもつメンバーが参加しているため、更新がずっとストップしたままということには至っていない。全員がSNSに参加し、またそれを活用するような工夫がなければ、参加しただけであって実質的に利用されているとはいえない状況になることは明白である。個別的な伝達事項をSNSに限るといった利用方法だけでなく、利用することによる特典を設ける必要がある。クリティカルマスに到達することができるか否かは特典の内容次第ともいえ、Media-SNSを利用するさまざまな人にとって魅力的な仕掛けづくりを模索しているところである。

#### (4) 基礎教育の深化

現在、城西国際大学においては、基礎教育は各学部に一任されている面がある。LAS センターが設置されたが、基礎教育支援機関としての位置づけにとどまっている。大学全体の基礎教育の司令塔としての役割には至っていないのが現状である。これまで基礎教育については各学部が工夫し実施してきたという経緯があり、また各学部が目指す目標がまったく同じとはいえないため、それらをゼロベースまで戻して再構築するというスクラップ&ビルドをしづらいという状況であることは確かである。しかし、それらをハーモナイズさせ統一的なものを構築するように試みしてみる価値はある。

本学では、副専攻等を除き、学部の壁を越えて学生が同じテーマに取り組むといった機会は少ない。これは、これまでの大学教育に照らせば特別なことではなく、ごく一般的な大学教育カリキュラムである。ただ、近年、特に基礎教育分野において、学部横断的にクラス編成が行われ、学生の専門性や興味とは関係ないテーマに取り組むといった大学が増加傾向にある。理系文系といった垣根も一切関係なく、薬学部の学生と文学部の学生が同じゼミで1つのテーマに取り組むといった姿である。たとえば、東北大学でも本学と同様に「基礎ゼミ」という名称で基礎教育が実施されているが<sup>6)</sup>、文学部、経済学部、法学部といった文系学部、医学部、工学部、農学部といった理系学部、合わせて10学部約2500名の新入生が事前に提示されている課題の中から取り組みたいクラスを選択し、学部の垣根を越えて学生たちが154のゼミに所属し課題に取り組んでいる。なにかを考えることという行為は、いずれの分野でも重要なことである。また分野というのは学問上便宜的に設けられているものであり、わたしたちの世界を構成しているもののたった1つの構成要素でしかない。それぞれの構成要素は複雑に交差し合っており、まったく無関係の分野同士を探す方が困難である。各学部が取り組んできた「基礎ゼミ」から英知を結集し、全学的な学部横断的な基礎教育を新たに展開することも重要な課題といえる。本学の場合は、各学部の「基礎ゼミ」を維持しつつ、全学的な基礎教育プログラムを設置することが望ましいと考える。

#### おわりに

導入教育の充実は、各大学の喫緊の課題となっており、模索が続けられている<sup>7)</sup>。教材開発で対応している大学、e-learningを取り入れて対応している大学、実施期間を通年にしたり短期集中にしたりして対応したりしている大学等、取り組み状況は非常にさまざまである。ただ、多くに共通しているのは、10～15名程度の少人数クラスで実施していること、実施方法の仕かけづくりに工夫を凝らしていること、である。

近年では、学力のレベルを国内ではなくグローバルに比較するようになった。現在、「学力世界一」の称号を得ているのはフィンランドである<sup>8)</sup>。これはPISAのテスト結果によるものである。2000年から3年ごとに実施しているテストで3回連続「学力世界一」と評価されている。テストの対象年齢

6) 詳しくは、東北大学高等教育開発推進センター（編）[2007] pp.72-89を参照されたい。

7) 各大学の取り組み状況としては、たとえば、東北大学高等教育開発推進センター（編）[2007]、濱名ほか（編）[2006]pp.107-173を参照されたい。

が15歳と大学教育以前の年齢に相当するが、導入教育が実施している基礎教育ということ考えた場合、参考にするべき仕掛けが存在していると見ていいだろう。

2008年度、メディア学部「基礎ゼミ」改革は3年目を迎える。解決できた課題と山積している未解決課題に対して、イノベーションとコラボレーションを旗印に新たな「基礎ゼミ」を実施する。Media-SNSをはじめとしてさまざまなものに積極的に取り組み、LASセンターとの協働、企業との協働も模索する。「基礎ゼミ」による基礎教育の成果向上を可視化できるようにすることも同時に進め、成果の客観性、検証可能性を高めたい。

## 参考文献

- オッリベッカ・ヘイノネン、佐藤学 [2007] 『オッリベッカ・ヘイノネン「学力世界一」がもたらすもの』NHK出版。
- 小淵究、小波津美香 [2007] 「メディア学部における導入教育の再導入」『城西国際大学紀要』第15巻第5号、pp.131-152。
- 東北大学高等教育開発推進センター（編）[2007] 『大学における初年次教育と「学びの転換」』東北大学出版会。
- 濱名篤、川嶋太津夫（編）[2006] 『初年次教育』丸善株式会社。

---

8) フィンランドの教育に関する書籍は多数存在するが、たとえば、オッリベッカ・ヘイノネンほか [2007] を参照されたい。フィンランドの教育改革を行ったとされるオッリベッカ・ヘイノネン氏は1994年に29歳で教育大臣に就任し、「学力世界一」の礎を築いた。